

# 海外エンカウンター・グループ研究の動向について

## 70年代の研究者たちはどこへ行ったのか？

Keyword: エンカウンター・グループ, 研究の動向, 研究者

金子周平<sup>1</sup>・高橋紀子<sup>2</sup>・廣梅芳<sup>1</sup>・安田郁<sup>3</sup>

(1九州大学大学院人間環境学府 2京都文教大学学生相談室 3福岡県公立中学校スクールカウンセラー)

**目的** エンカウンター・グループ (以下 EG) に関する研究を概観すると、引用されている海外文献は非常に少なく、また散見する引用文献も年代の古いものが多い。その理由の一つは EG という名称を用いた研究がかなり減少しているためであろう。PsychoINFO (Ovid : 心理学関連情報を収録したデータベース) において “Encounter group” をタイトルに使用した研究を検索すると、80年代以降の EG 研究は1年に3論文以下である (右段の Figure1)。研究自体が減少しているだけでなく、EG の実践も減少しているようである。伊藤 (1993) はシカゴで行われた第三回フォーカシング国際会議での以下のような会話を紹介している。

『アメリカではエンカウンター・グループはどうなっているか。』とたずねた時、『もうやられていない。70年代で終わった…以下略』ということだった。

しかし、70年代以降にアメリカで EG 研究を盛んに行っていた研究者たちの中には、それ以降も研究や実践を続けていた人たちがいるはずである。それらの研究者たちが「エンカウンター・グループ」という用語を使わなくなり、別のキーワードによるグループ実践・研究を行っているとする、それらの新しい研究における知見は、現在の日本における EG の実践・研究においても非常に参考になるものであろう。本研究では70年代以降に EG 研究を行っていた研究者たちが、現在どのようなキーワードで、またどのような分野でグループの実践・研究を行っているかを把握することを目的とする。

**方法** 本研究は PsychoINFO (上記) によって検索された研究を対象とし、それらを元に演者らがデータを構成、論文内容からキーワード等を抽出したものである。

① “Encounter group” に代わるキーワードとしてまず考えられるものは、“Support group”, “Self-help group” である。さらに福井 (1993) を参考にすると、Rogers と同じく「共感的応答」を主張した Kohut による自己心理学 “Self Psychology” も考えられる。それらのキーワードに関して Figure1. (右段) と同様の方法により、研究の推移を把握し、比較検討する。

②エンカウンター・グループに関する研究を行っていた研究者のその後の論文を追跡する。本研究ではその中でも特にグループ研究を行っている研究者を対象に、研究の概要 (研究のキーワード・実践分野・メンバーの特徴など) を把握する。

**結果** ① “Support group”, “Self-help group”, “Self Psychology” をキーワードとして行われたグループに関する研究は、そのどれもが80年代から始まり急増している (Figure は省略)。これは EG 研究の減少とちょうど同じ時期にあたる。

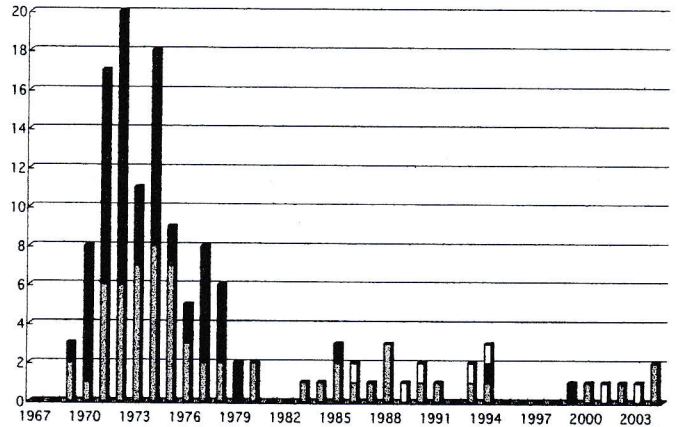


Figure1. 海外 EG 研究の推移

② “Encounter group” をタイトルに含んだ研究を行っていた研究者 (193 名) の内、その後も論文を発表している研究者は 94 名。その内グループに関する研究を発表している研究者は 29 名 (重複を除くと 24 名) である。

中には “Person-centered approach (Boy, A.V.)” や “Humanistic / Transpersonal (Rowan, J.)” をキーワードにしてグループ・実践を行っている研究者もみられる。しかしそれ以外の 22 名のグループ実践分野は多岐に渡っている。それらの中でみられた主なキーワード [( ) 内に研究者名] は, “self-help group (Dias, R. R.; Moos, R)”, “Self-Psychology (Arensberg, F.)”, “Short-term group (Willis, S. L.)”, “Sensitivity training groups (Hanson, R. G.; Weinstein, M. S.)”, “All-male group (Rabinowits, F. E.)”, “family network group (Rueveni, U.)” などである。グループのメンバーも入院、もしくは通院の慢性統合失調症患者、その家族、薬物依存患者、高校生など様々である。

**考察** 本研究の結果からは、日本における “PCA Group (鎌田, 本山, 村田, 2004)” のように明らかに EG 研究の流れを受けたキーワードや一連の研究などは見つけることができなかった。全体的なグループ研究の流れは、EG のような自由度の高いグループから、対象者をある程度特定し、明確な契約を前提としたグループ (Support group や Self-help group) に移行してきたようである。

しかしパーソン・センタード・アプローチの分野でグループ実践を行っている研究者を筆頭に、過去に EG 研究を行っていたグループ実践家・研究家が、現在多岐に渡る分野で活躍し、また新たな知見を蓄積していることが推察された。

\* 当日発表時は、より詳細なデータとキーワード等を提示する予定である。